

「自明とはどういうことか？」

2016年2月20日(土)
喫茶室ルノアール 新宿区役所横店[3号室]
参加：10名
司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・総勢 10 名で、主に、A 案（客観的に見える世界を疑い得ないとする考え）、および、B 案（自身の中の窓から世界を観察する主体を疑い得ないとする考え）の二つについて考え、対話を深めました。

2. 対話：

- (0) 「邪悪な魔物：理性で理性を疑えるだろうか？ージュリアン・バジーニ著：『100の思考実験』より」
 ・きっかけとして、進行からルネ・デカルトの「省察」からの引用*1を紹介。問いを「自明とはどういうことか？」から「どんなに疑っても絶対に疑いきれないものは何か？」へ変えて考えたいと提起した。
 *1：ルネ・デカルト「第一省察」より
- (1) 疑い得ないものとは？
 ・疑い得ないものには、大きく次の二つがある：
 a) そのように決め事としているもの。例；言葉の定義、ルールとして決めている法律、等々。
 b) 「ある」ということ。存在しているものと存在そのもの。例；テーブルの上のコップ、等々。
 →進行の提案によって、a)のように決め事であるというものはここでは除き、b)のようなものを考えて行くこととした。
- (2) 客観的に見える世界そのもの：A 案
 ・通常私達が「ある」として当たり前前に生活する世界そのもの。この世界は「ある」としか疑い得ない。
 →「なぜ世界があるとしか疑い得ないか」と言えば、「ない」ということ（＝無）を考えることができず、また考えても仕方がないからである。
- (3) 自身の中の窓から世界を観察する主体：B 案
 ・自分の中（おそらく脳の中）には世界が見えている窓が開いていて、その窓を通じて世界を見ている「何か」存在がある。この何かの存在だけは疑い得ないと思う。
 ・その何かの存在は、＜私＞ではないのか？
 →＜私＞である必要性は必ずしもない。＜私＞であるのかもしれないが、そうでなくてもいい。
- (4) 何でも疑い得るのではないか：C 案
 ・論理学における論理を普段私達は正しいとしているが、それすらも疑い得るとするのか。「疑い得ない」における「できる」を可能性として捉えたと、論理を疑うことを可能とすれば、何でも疑い得るということになるはずである。
- (5) 疑い得ない確かな経験は何か？
 ・記憶は疑わしいが、私がこどもを産んだことは何人も目撃者がいるし、これは疑い得ないと私は思う。
 →記憶が疑い得るなら、こどもを産んだことも疑い得るのではないか。
 <ここで休憩とし、A 案と B 案を各自で理解・納得する時間とした>
- (6) デカルトが行き着いた＜我思うゆえに我あり＞
 ・進行から次のことを説明した：デカルトは、真理を探究していく開始前に、確固たる根本原理が何かをはっきりさせるため、絶対に疑い得ないことは何かを考えた。疑い得るものは徹底的に退け、それでも疑い得ないものは何かという手法（＝方法的懐疑）により考え続け、「そうやってどんなことでも疑ってみようと考えている間にも、この疑い、考え続けている＜私の存在＞だけは疑えない」として、「我思う、ゆえに我あり」に行き着き、それを哲学の第一原理とした。
- (7) A 案について
 ・普段私達が当たり前前に日常生活を送るためには、この A 案を信じて疑っていては、生活が成り立たないはずである。
 ・「ない」こと（＝無）を考えられないということでは不充分であれば、どういう理由から A 案は確からしいのか？（自分だけではない、複数の）観察者によって、その存在が観察、確認できているからか。
 →これだけ科学が発達して、その結果から、観察者（＝人間）の感覚には依存しない観測方法によっても何かを検知できるのだから、その何かを有する「世界はある」ということは確からしいはずである。
- (8) B 案について
 ・その「何か」とは何なのか。自分の中（おそらく脳の中）にあるのか？
 →自分の中（＝脳の中）でなくとも、どこでも（例；コップの中、他者の中にある）ということでもいい。
 ・例えば、「今私はテーブルの上のコップを見ている」という状態だが、私がじっくりコップを見れば見るほど、「私はコップを見ている」というよりは、「コップが見えている」というようにしか思えず、私はどうでもよく、私がなくなる（＝忘我）状態となる。それと同じような考え方ではないか？
 →そういう考え方である（＝に近い）と思う。
 ・B 案は、デカルトが考えた「我思うゆえに我あり」というテーゼの中の＜私（＝我）＞とは異なるのか？
 →その何かはどこにあるのかは、自分自身では分からない。だから、必ずしも＜私＞であるとは限らない。
 <私＞でなくとも（そうでなくとも）いいという考え方である。
 ・例えば、その私の（世界を観察する）何かは、他者の脳の中にあり、その他者の何かは自分の脳の中にある（つまり自分の何かと他者の何かが入れ替わっている）としても、成り立つ（いい）。

3. まとめ：

- ・「我思う、ゆえに我あり」を疑い、彼が疑い得ないとした＜私＞を疑ってみたことには意味があったと思う。
- ・対話中に「なぜ疑うのか？」「なぜ疑いたくなるのか？」という問いが提起されたが、別の機会に考えてみたい。
- ・「我思う、ゆえに我あり」における「思う」または「ゆえに」を疑って考えてみても面白いと思った。

以上